
朋友だより

今年最初の朋友だよりをお届けします。
本文で紹介した堤未果氏が著書で訴えている事態は極めて
深刻な問題です。
どのように考えるべきかについて検討しました。
ご参考になれば幸甚です。

2019年2月

(有)コンサルタント朋友
代表取締役 奥長弘三



経済活動の本質を考える



現在の日本でとんでもない事態が進んでいる

堤未果著『日本が売られている』(幻冬舎新書 2018年10月)を読みました。米国、中国、EUのハゲタカ達が日本を買い漁っている現状を伝えています。

日本人の資産としての水、土、タネ(種子)、ミツバチの命、食の選択肢、牛乳、農地、森、海そして築地が海外の多国籍企業にどんどん売られています。それだけでなく、「日本人の未来が売られる」として、労働者、日本人の仕事、ブラック企業対策、ギャンブル、学校、医療、老後、個人情報などが外国の大企業に売られている現状を報告しています。

何故、この様になったのでしょうか。著者は「まえがき」で述べています。

売国とは、自国民の生活の基礎を解体し、外国に売り払うこと。即ち、自国民の命や安全や暮らしに関わる水道、農地、種子、警察、消防、物流、教育、福祉、医療、土地などのモノやサービスを安定供給する責任を放棄して市場を開放し、外国人にビジネスとして差し出すことである。(中略)

多国籍企業群は、民間商品だけでなく、公共財産にも触手を伸ばし、土地や水道、空港に鉄道、森林や学校、病院、刑務所、福祉施設に老人ホームなどがオークションにかけられ、最高値で落札した企業の手落ちるようになった。企業は税金を使いながら、利益を吸い上げ、トラブルがあったら責任は自治体に負わせ、速やかに国外に撤退する。(同書P.5)

そんな日本が実は猛スピードで内側から崩されていることに、一体どれほどの人が気づいているか。次々に売られていく大切なものが、絶え間なく届けられる派手なニュースにかき消され、流れていく日常に埋もれて、見えなくなってしまう。(同書P.7)

現在の安倍政権は、まさにこれを押し進めている張本人です。「大企業が一番活躍しやすい」国づくりを強引に進めています。各種の制約を取り払い、大企業が自由に活躍できるよう、日本を差し出しています。それだけでなく、財界主導の「成長戦略」により、各地に被害が出始めています。

例えば奈良県では、安倍政権の観光立国をそのまま踏襲した形で、外国人富裕層の観光客を呼び込もうと、平城宮跡国営公園事業、大宮通り高級ホテル建設、奈良公園整備を合わせて「大宮通りプロジェクト」と名付けた開発を推進し、東京オリンピックまでの開業を目指しているとのことです。(雑誌「前衛」2019年3月号P.109～P.110)

勇気と展望を与える文章

前項のような厳しい現状に立ち向かう勇気と展望を与えてくれた文章に出会いました。高橋源一郎、辻信一共著『「雑」の思想—世界の複雑性を愛するために—』(大月書店 2018年11月)です。同書の「はしがき」で辻信一氏は述べています。

「スローライフ」とはたんなる「のんびりした暮らし」のことではない。これは経済的な効率性を最優先して、大切なものごとを犠牲にするような社会への異議申立だった。生存のための自然界とのつながりも、人間どうしの社会的なつながりも、それらを育み、持続するための十分な時間とケアが必要だ。そうした本質的な関係性さえ、生産性、経済効果、効率性などの観点からは単なる資源、“合理化”されるべき無駄、犠牲にしても構わない価値、つまり雑事、雑用とみなされています。そんな本末転倒の社会のあり方からの転換を目指す運動、それがスローライフなのである。(同書P.6)

この運動のなかで「雑」という概念が形づくられたといえます。

「雑」なるモノやコトが無ければ、ぼくたちの暮らしはずいぶん淋しいものとなるだろう。(P.7)

マスメディアを通しては見えなくても、新しい時代はすでに世界のあちこちで始まっているとぼくには思える。地産地消、パーマカルチャー、エコビレッジ、無銭コミュニティ、コミュニティ・デザイン、ギフトエコノミー、連帯経済、自然農、大地の再生、森林農法、スローフード、マルシェ、フェアトレード、エシカルファッション、カルマキッチン、シェアハウス、森のようちえん、補完、代替医療、宅老所……それらを手がける「雑民」たちは、まるで現代に蘇った古代人のようではないか。かれらの背後には、グローバルからローカルへ、集中から分散へ、GNP（国民総生産）からGNH（国民総幸福）へ、貪欲から充足へ、間接民主主義から直接民主主義へと向かう雑のエネルギーの溢れる大きな流れがある。(P.9)

原点にもどる

E.F シューマッハ-著『スモール イズ ビューティフル——人間中心の経済学——』（小島・酒井訳 講談社学術文庫 1986年4月）を読みました。前述の『「雑」の思想』の P.34 で紹介されていたものです。

原著が書かれたのが1973年、いわゆる高度成長が始まる前夜に書かれた書物ですが、経済活動の原点を示しています。

1. 人間にとって働くことは基本的なこと

人間性は主に仕事を通じて培われる。自信をもってのびのびと仕事をすれば、仕事をする当人とその作るものは素晴らしいものになる。(同書 P.73)

人間は仕事が全く見つからないと絶望に陥るが、それは単に収入がなくなるからではなく、規律正しい仕事だけが持っている人間を豊かにし、活力を与える要素が失われてしまうのが原因である。(P.73)

2. 市場とは何か

経済学は財やサービスを売り手と買い手

が出合う市場という観点から扱っているといえる。買い手はもともと出物を探しているわけで、品物の産地や背景などに関心を持たない。関心があるのは安い買い物をするだけである。この様なわけで、市場は社会の上っ面にすぎず、その意義は、その時々瞬間的な状態を示すことである。モノの背後にある自然、社会の事実には全く関心が払われない。ある意味では市場というのは、個人主義と無責任が制度化されたものといえる。買い手も売り手も自分だけにしか責任を負わないからである。(P.58)

市場とは、個人と社会全体にとって極めて重要な質的区別というものがある。区別が表面に現れることを許さない。従って、量が市場を支配し、君臨する。一切のモノが同等と見なされる。ということは値段が付けられ、相互に交換できるようになるという意味である。(P.60)

3. 組織の規模は大きくない方がよい

今日でも、巨大な組織というものはどうしても必要なのだと言われている。しかし、事実をよく見れば、巨大な組織が生まれると、たいいていの場合、すぐその中に小さな組織を作ろうとする努力が払われることに気がつく。(P.83)

巨大組織としての一体性を維持しながら、同時に無数の「準会社」の連合体でもあるといった「雰囲気」ないし感覚を生むような構造を作り上げる試みである。(P.84)

人間というものは、小さな理解の届く集団の中でこそ、人間でありうる。(P.97) 私は技術の発展に新しい方向を与え、技術を人間の真に必要な物に立ち返らせることが出来ると信じている。それは人間の背丈に合わせる方向でもある。人間は小さいものである。だからこそ小さいことはすばらしいのである。巨大さを追い求めるのは、自己破壊に通じる。(P.211)

経済は人間の生活・暮らしを豊かにする為に存在するものです。今こそ人間の為の経済の原点に戻ることが必要でしょう。



